

英語教育における「教養」と「専門」

山 田 素 子

英語と日本語のバイリンガルを目標とする為には、両方の言語地図、即ち、個人語の二カ国語による同量の表現をめざさなくてはならない。高等学校のカリキュラム程度の内容がすべて英語で表現されていて、日本語と同程度にそれを理解できる能力が、現代の社会では特に必要になってきている。このような英語能力の開発をめざして、科学・社会・経済関係の入門書や教養書を英語のテキストとして使用してみた。

ところがアンケートによる学生の反応は意外である。学生は「英語＝文学関係」と考えているらしい。筆者の文学関係のテキ

ストを用いたクラスのアンケートの評判は概して良かったが、それ以外は、学生の期待を裏切ったという反応が五割を越えていた。例えば、科学関係のテキストのクラスでは、「このようなテキストは専門の先生に教えて欲しかった」という声があった。このような現実をどうとらえるべきだろうか。言語修得において「英語は日本語と同じようにもう一つの言語である」という根本認識が、学生側に欠けていることを、改めて気付いた次第である。授業の評判は用いているテキストによって随分と変化することが判明した。